HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	日本語特定数量詞における語種の混用 : 数詞を中心に
Author(s)	張, 琴琴
Citation	言語科学研究, 1, 29-43
Issue Date	2024-03-29
DOI	10.14943/110401
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/91820
Type	article
File Information	1_04-CHO Kinkin.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

日本語特定数量詞における語種の混用

―数詞を中心に―

張　琴琴

1. はじめに

本論は、「有標性（markedness）」という概念を用いて特定数量詞を構成する一部である数詞の語種の混用実態を明らかにするものである。日本語の数量詞とは、主に数詞と助数詞を組み合わせたもの（3匹）を指すが、実際これ以外に、「たくさん」や「2〜3人」などのようなものもある。張（2024）では、前者を特定数量詞、後者をそれぞれ不特定数量詞、準特定数量詞としている。現代日本語における数量詞には、古く中国から伝わった漢語系の数詞と、もともと日本で使用されてきた和語系の数詞がある。近年、西洋文化の影響により外来語の数詞も使用されるようになってきた。例えば、「1人」を「ひとり（和語）」または「いちにん（漢語）」と読むことができる。このように現代の日本語の数詞では漢語系と和語系の数詞が混在している。さらに、「1セット」は「いっセット」、「いちセット」、「ひとセット」、「ワンセット」という4つの形態を持っている。本研究では、このように音韻形態上多様である特定数量詞を取り上げる[1]。

従来、数詞や助数詞に焦点を当てた歴史的整理は、安田（2004、2015）、柚木（1999）などによって行われてきた。共時的な研究では、田野村（1990）、成田（1998）などが挙げられる。これらの研究は主に和語系列数詞と漢語系列数詞に重点を置いて調査や整理が行われてきた。しかし、実際に現代日本語の数詞には近代中国語やフランス語、イタリア語から借用されたものも見られる。本稿では日本語の数詞を整理する際に、これらを周辺的なものとして扱うことを考える。また、日本語の数量詞の音韻と形態が対応しておらず、社会言語学的な「ゆれ」といった現象については、慣習とする記述しかない。

本稿では、特定数量詞[2]を構成する一部である数詞に注目し、形態論的な観点から整理した上で、助数詞との合成による語種の混用について考察する。また、包括的に数詞を観察することで、現代日本語における数量詞の実態を明らかにすることを目的とする。本稿の構成は以下の通りである。2節で、現代日本語の数詞の形態を整理する。3節において、本稿で扱うデータについて簡単に説明する。4節においては、数量詞に着眼し、その中における数詞の語種の混用問題について詳しく考察する。5節では本稿をまとめることにする。

2. 数詞の四形態

中国語や英語より、日本語の数詞の読み方は複雑であり、外国人の日本語学習者にとって最も難しいところの1つでもある。この原因は漢語系の数詞以外に、和語系と借用語系といったものが存在するという事実に帰する。世界共通の概念として、「1、2、3」のような一の位の数詞もあ

---

[1] 特定数量詞には「7大学」のようなものもあるが、今回は対象外とする。また、準特定数量詞のうち、数詞の読みのゆれも見られるが、ここでは割愛する。

[2] 以降「数量詞」に略称する。

れば、「10、20」、「100、200」、「1000、2000」のような十の位、百の位、千の位の数詞もある。日本語の場合は、桁数の大きな数字は3桁ごとにカンマで区切られることが一般的である。また、数字の桁の読み方について、「一」から始め、「十」、「百」、「千」、「万」、「億」、「兆」、「京」まで多くの人に知られているが、実際には「京」より大きい数字も存在する[3]。本稿は語種の混用を考察するため、最も一般的に使用される1から10までの数字を対象とする。

2. 1　漢語系の数詞

日本で使われている漢語系の数詞は主に呉音に由来すると言われている。数量詞を表すのに、漢語系の数詞と和語系の数詞が混ざって用いられるのは現代日本語の現状である。例えば、「ひとり」、「ふたり」は和語の数詞であるが、3人になると、「さんにん」という漢語の数詞に切り替わる。和語「みたり」という言い方について、年配の人は使用するかもしれないが、若者はほとんど使わないのであろう。田野村（1990）は、「よ／よん」「なな」が文法上漢語の数詞と同じ資格で用いられていると考え、「漢語系列の数詞」は、漢語の数詞だけでなく、「よ／よん」「なな」という和語の数詞をも含んだものとして定義している。

田野村（1990）による漢語系列の数詞：
　いち、に、さん、し／よ／よん、ご、ろく、しち／なな、はち、く／きゅう、じゅう

『NHK日本語発音アクセント新辞典（2016）』に記載されている数量詞の一覧表を確認すると、確かに「し」より「よん」、「しち」より「なな」のほうが多く使用されている。田野村（1990）は「枚」という一例だけを挙げ、「よ／よん」「なな」が文法上漢語系の数詞と同じ資格を持つと判断しようとするが、この文法上とは何かについては一切言及していない。したがって、上記のように整理されるのはあくまでも便宜的なものしかないと思われる。それに対して、成田（1998）は漢語数詞系列を以下のように挙げている。

成田（1998）による漢語数詞系列：
　いち、に、さん、し、ご、ろく、しち、はち、きゅう／く、じゅう

「きゅう」は漢音に由来し、「く」は呉音から伝来したようである。しかし、実際に数量詞の中で「きゅう」のほうが圧倒的に多く使用されていることがわかる。日本の忌み数には、「4」、「9」があり、4は「死」、9は「苦」に通じることから、使用上できるだけこのような言い方を避けている傾向が見られる。中国のホテルやマンションでも「4」、「14」のような不吉な数字を避ける現象が見られ、同様のことがフィリピンでも見られると言われている。しかし、日本語では、「4月」、「9月」のように「し」、「く」しか使わない場合がある[4]。本稿は成田（1998）に倣い[5]、漢語系の数詞を以下のように定義する。

---

[3] 和算研究所塵劫記委員会（編）（2000）『現代語　塵劫記』を参照されたい。

[4] 旧暦では、和風月名としては、1月～12月のことを睦月、如月、弥生、卯月、皐月、水無月、文月、葉月、長月、神無月、霜月、師走と呼ばれている。

[5]「一般的な数詞形態の第一系列」として、「よん」、「なな」を入れている（成田1998）。

表 1. 漢語系の数詞

数 / 語種	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
漢語系	いち	に	さん	し	ご	ろく	しち	はち	きゅう・く	じゅう

2. 2　和語系の数詞

近年、和語系の数詞が徐々に衰退し、本来の「ひと、ふた…」という和語の表現が「いち、に…」という漢語系の読みに置き換わる傾向が顕著になっている。特に、3 以降の数詞は和語助数詞とともに用いられる以外では、ほとんど漢語系の数詞に切り替わっている。例えば、花びらの数え方の場合は、「ひとひら、ふたひら」がよく使われているが、3 以上になると、「枚（まい）」という助数詞に切り替わるのが普通である。助数詞「ひら」は和語であるため、数詞としては和語のほうが相応しいかもしれないが、和語系の数詞を通じて、大和言葉の美を表現していることも考えられる。田野村（1990）では以下を和語系列の数詞とされる。

田野村（1990）による和語系列の数詞：
　ひと、ふた、み、よ、いつ、む、なな、や、ここの、とお

これは数詞の後ろに助数詞「つ」が付く場合の読み方である[6]。田野村の整理を概観すると、漢語系列と和語系列の両方に「よ」が存在することが観察される。「漢語系列の数詞として用いられる際の「よ／よん」、「なな」は、和語の数詞ではあっても、文法上、和語系列の数詞ではない」と田野村（1990）では説明されているが、両系列の数詞に同じものを入れるのであれば、語種を区別する際に、紛らわしくなると考えられる[7]。

一方で、成田（1998）は和語系列の数詞を、「もともと日本語にあった和語の数詞の系列」と「和語の数詞に「つ」のついた系列」という 2 系列に分けている。詳細は以下のように示しておく。

成田（1998）による和語数詞系列：
第一系列：
　ひ、ふ、み、よ、いつ、む、なな、や、ここ、とー

第二系列：
　ひとつ、ふたつ、みっつ、よっつ、いつつ、むっつ、ななつ、やっつ、ここのつ、とー
　　みつ、　よつ、　　むつ、　　やつ

第一系列の数詞について、「この数詞を単独で使うことは、相撲や日本舞踊などの伝統文化・芸能の世界を除けば、もはやほとんどない」と成田（1998）で述べられている。数詞の後ろに助

[6]「つ」がつけられるのは 9 までの数字となる。

[7]「よん・なな・きゅう」の浸透について、城岡（2009）では地名・小字名・姓を中心にデータを挙げて説明されている。「ヨンとナナを和製漢数詞と捉えることが可能である」、「サンとヨンの語形の類似も考え合わせれば、ヨンは和製漢数詞で漢数詞のサンと同等と見なすのが妥当だ」と述べている。

数詞が使われることも見られるが、確かにこれ以外ではほとんど見受けられない。つまり、第一系列の中で、「なな」を除けば、すべての数詞は非自立語のようなものであり、第二系列は名詞のような自立語である。また、第一系列の数詞のすべてが助数詞と組み合わせることができるわけではない。例えば、「み切れ」、「よ切れ」という使用が見られるが、「ひ切れ」、「ふ切れ」という言い方はない（ひと切れ、ふた切れがある）。このように、第一系列の数詞を使用する際に、強い制約を受けることがわかる。近世の頃「よ」から派生した「よん」が一般化され、現代日本語において定着しているように見える。しかし、成田（1998）はこれを対象としていない。そして、「なのか」[8]の「なの」、「ようか」[9]の「よう」、「ここのか」の「ここの」なども和語の系列には含まれていない。また、「とー」は数える際に使われる表現であり、本来の形は「と」である。そこで、本稿はこれまで見逃されていたものも対象とし、以下のように整理し直すことを試みた。

表 2.　和語系の数詞

語種＼数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
和語系	ひ	ふ	み	よ・よん	いつ	む	なな	や・よう	ここの	と
	ひと	ふた	みつ	よつ	いつつ	むつ	なの	やつ	ここのつ	とお

日本語の和語数詞の分類について、安田（2015）[10]では、「個数詞」、「日数詞」、「人数詞」「唱数詞」という４系列に分ける必要があると指摘されているが、管見では、例えば、「人数詞」の「ひとり」、「ふたり」という読みが一般的に使われている一方、「みたり」、「よたり」、「いつたり」などはほとんど使われていない。そのため、敢えて新たな１系列を設ける必要がないと思われる[11]。したがって、本稿は表２の「和語系の数詞」に示したようにまとめることにする。

実際、以上のように、語種ごとに漢語系の数詞と和語系の数詞の２系列に分けることができるが、日常の使用においては、きれいに分けることができず、「いち・に・さん・よん…」のように漢語系列の中に和語が混在していることがある。つまり、この２系列の数詞が混ざり合って使用されているのである。第３節では、数量詞のデータを用いてこれらの数詞がどのように混ざっているのかについて分析する。

2. 3　英語系の数詞

従来の研究においては、この系列の数詞を外来語系列として扱われるのが一般的である。しかし、外来語と言えば、英語だけでなく、フランス語やイタリア語、ドイツ語から借用されたものも含まれる。そして、現代日本語では特定の環境や場合を除けば、ほとんど英語から借りた数詞が使われている。このため、本稿は外来語系列の数詞や外来語の数詞という用語を用いらずに、英語系の数詞ということばを使用する。

---

[8]「7日」は昔「なぬか」と呼ばれていたようである。

[9]「8日」は「やか」から「やうか」に転じて、さらに現在の「ようか」となったようである。

[10] 安田（2015）は、通時的に日本語数詞を紹介しており、詳細はそれを参照されたい。

[11] 10を「はたち」の「た」や「みそじ」の「そ」でも表せるが、残存しているような言い方であるため、表２に入れないことにする。

表 3.　英語系の数詞

語種＼数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
英語系	ワン	ツー	スリー	フォー フォア	ファイブ	シックス	セブン	エイト	ナイン	テン

4 は「フォー」と「フォア」の 2 種類の読みがあると成田（1998）で述べられ、野球用語の「フォアボール」、ボート競技用語の「ボート（舵無し／舵付き）フォア」を例として挙げられている。野球の発祥地はイギリスであり、その後アメリカで人気になって明治時代に日本に伝ったと言われている。実は、「フォアボール」は「四球」ということばを英語の「four ball」に和訳された後に作られた和製英語である。本来、記録や成績の表記などでは「base on balls」、普通に言う際は「walk」という表現が使われる。つまり、「フォアボール」は実質的に和製英語化されている。和製英語を用いたほうがより意味を正確に伝えやすくなるかもしれないが、逆に英語に訳すと、異なる意味になる可能性もある。また、英語系の数詞は主に外来語の助数詞と合成して使われるが、近来、国際化が進み、「ラーメン、ツー」のような言い方も見られる。

2. 4　その他の外国語

これまで現代日本語において主流である 3 系列の数詞を見てきた。実際にこれら以外のものもあり、例えば、麻雀というジャンルでよく用いられる近代中国語から借用された数詞である。安田（2015）では「イーチャン（一荘）」、「リャンコ（両個）」の「イー」や「リャン」が数詞として機能しているのではなく全体で一語と見るべきだと指摘されているが、本稿は、上述した数詞のほか、限定されている場合に使われる数詞が存在する点から考え、以下のような数詞を「その他の外国語」として扱うこととする。

表 4.　その他の外国語の数詞

語種＼数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
近代中国語	イー	アー（アル）	サン	スー	ウー	ロー（リウ）	チー	パー	チョウ（チウ）	
フランス語	アン	ドゥ	ト（ロ）ワ	キャトル	サンク	シス	セット	ユイット	ヌフ	ディス
イタリア語	ウーノ	ドゥーエ	トレ	クワットロ	チンクエ	セイ	セッテ	オット	ノーヴェ	ディエーチ

麻雀の数牌は「1」から「9」までしかない。上記の表からわかるように、「3」と「9」の読みは漢語系の読みと同じである。個人的な習慣によって、「9」を「チュー」と言う人もいるようで

ある[12]。また、近代中国語の「2」は「アー（アル）」と「リャン」の２つの言い方があり、「リャン」は中国語の「両」の発音に由来し、実際の数詞の発音ではない。麻雀などで数え上げる際に「イー・アー（アル）…」のように「二（er）」を使うことも見られる。「2」は名詞に付く際に、「リャン」を使うが、「両」は本来の日本語では「りょう」と言う。しかし、「両面（りゃんめん）テープ」のようなものは一般語として使われている。フランス語の数詞「1」に対して、「アン（un）」と「ユヌ（une）」の２つの表現が存在するが、「ユヌ（une）」の場合、例えば、「ユヌ・ピエス（une pièce）」などの成句であれば、数詞として現れることがある。しかし、実際にこの「un」と「une」は不定冠詞（＝英語の a）としても使われ、そして、「ユヌ（une）」は不定冠詞としての用法が主であり、数詞は「アン（un）」に限定されている。これについて、数詞と冠詞の境界を議論する必要があるため、本論は「ユヌ」を数詞「1」の読みに含めないこととする[13]。このほかに、フランス語から来たものやイタリア語から来たものもある。例えば、「UNO」というゲームの名前はイタリア語の数字の「1」を意味する「uno」に由来すると言われている。この種の数詞は主に限定されたジャンルや環境でしか使われないが、使う人が増えれば、将来、数詞の１つの読みとして定着していく可能性がある。

3. 本稿のデータについて

『NHK 日本語発音アクセント新辞典』において、「数詞＋助数詞の発音とアクセント」について、現代の多様なアクセントの中から、放送など、ある程度あらたまった場面で、より伝わりやすいと思われるものを掲載したと説明されている。つまり、普段の生活では使われているが、正式ではない発音や言い方などは、この辞典に掲載されない場合があることを示唆する。例えば、花弁を数える際に、1 枚を「いちまい・にまい」と数える人がいる一方、「ひとひら・ふたひら」と数える人もいる。しかし、後者の言い方は辞典に掲載されていない。

また、一般的によく使われる助数詞や単位などから選んだ 258 項目について、1 から 20 までの数詞の発音が五十音順に示されている。数詞の語種の混用を客観的に考察する際に、正確な発音を把握することが非常に重要である。そのため、本稿はコーパスや数詞の読みに関するアンケート調査といった研究方法を使用せず、『NHK 日本語発音アクセント新辞典』から得たものをデータとして用いることとする。次節では、辞典から抽出したデータを用いながら、数量詞において数詞の語種がどのように混在しているかを考察していく。

4. 数量詞における語種混用

上記で述べたように、日本語には漢語系と和語系、英語系、その他の外国語といった数詞がある。数量詞において、これらの数詞が混ざって使用されるのは一般的である。従来、どのような場合で漢語系の数詞が促音化になり、どのような状況下で助数詞が濁音や半濁音になるかという整理がされてきたが、語種の混用についてはほとんど言及されていない。また、数量詞の読みについて、アクセント辞典に法則などが記載されているが、数量詞における数詞の語種の切り替えという点について考慮されていない。そこで、本稿は『NHK 日本語発音アクセント新辞典』に記載される 258 項目を対象とし、「和語から漢語に切り替わるタイプ」、「一貫しているタイプ（和語・漢語・外来語）」、「両方とも用いられるタイプ（和語と漢語）」の３タイプに分け、数詞

[12] 現代中国語では「6」は「リュー」、「9」は「ジュー」と発音する。

[13]「un」は男性名詞に付ける形であり、「une」は女性名詞に付ける形である。

の語種の混用という現象について言語学の視点から考察してみる。

4. 1　和語から漢語に切り替わるタイプ

田野村（1990）では和語系列の数詞と組み合わせられる助数詞として、「つ」、「か（日）」、「つき（月）」、「り（人）」しかないと指摘される。この中で、「つ」と「とお」の組み合わせが存在しないことや、「か（日）」において、「1 日」は「いちにち」と発音しなければならないという特殊的な使い方などが整理されている。しかし、漢語の「いちにち」以外に、和語の「ひとひ」や混種語の「いっか」、漢語の「いちじつ」という言い方も見られる。そして、この 4 種類の助数詞以外に、「柱（はしら）」のような和語系の数詞とともに用いられる助数詞が見られる。また、「り」の場合では、「ひとり」、「ふたり」を除けば、「さんにん」、「よにん」、「ろくにん」のように助数詞が漢語に切り替わって使うのが一般的である。さらに、和語系列の数詞と用いられる和語系助数詞の考えで整理するのであれば、「切れ」、「株」、「皿」などもあり、これらも合わせて整理すべきだと考えられる。田野村（1990）では漢語系列の数詞と和語系列の数詞が併せ用いられる助数詞として取り上げられているが、助数詞の中には漢語系や和語系、外来語系のものも混ざっており、結局、整理が混乱しているようにしか見えないと思われる。したがって、本稿は数詞を中心に、数量詞の実態を明らかにする。

本節では、まず和語が漢語に切り替わるものを整理し直す。また、多くの数量詞は 10 を超えると漢語に切り替わるため、10 以下の数詞に絞って検討していく[14]。必要に応じて 10 以上の数詞についても適宜に触れていく。次に、アクセント辞典に記載されている 258 項目の数量詞から抽出した対象となる 38 項目を以下の表 5 にまとめて示す。表の中に下線で示しているのは許容される読みであり、以後の表中も同様の扱いである。また、「灰色」で塗りつぶされた数詞は和語が主であり、それ以外の数詞は漢語が主であることを表している。

表 5. 切り替わるタイプ

	1	2	3	4	5
家族	いち家族 ひと家族 <u>いっ家族</u>	ふた家族 <u>に家族</u>	さん家族	よん家族	ご家族
カップ	いちカップ ひとカップ	にカップ ふたカップ	さんカップ	よんカップ	ごカップ
株	ひと株	ふた株	さん株 <u>み株</u>	よん株[15]	ご株
缶	ひと缶 <u>いっ缶</u>	ふた缶 <u>に缶</u>	さん缶	よん缶	ご缶
切れ	ひと切れ	ふた切れ	み切れ <u>さん切れ</u>	よん切れ <u>よ切れ</u>	ご切れ

[14] 7 を除けば、5 以上になると、ほとんど漢語の数詞が用いられているため、表に示す際に、5 までのデータを挙げることにする。

[15]「よ株」という言い方も見られるが、『NHK 日本語発音アクセント新辞典』に記載されていないため、除外することとする。

区画	いち区画 ひと区画 いっ区画	ふた区画 に区画	さん区画	よん区画	ご区画
区間	いち区間 ひと区間 いっ区間	ふた区間 に区間	さん区間	よん区間	ご区間
口	ひと口	ふた口	み口 さん口	よ口 よん口	ご口
組 〈靴下等〉	ひと組	ふた組	さん組 み組	よん組 よ組	ご組
クラス	いちクラス ひとクラス	にクラス ふたクラス	さんクラス	よんクラス	ごクラス
グループ	いちグループ ひとグループ	にグループ ふたグループ	さんグループ	よんグループ	ごグループ
桁	ひと桁	ふた桁	さん桁 み桁	よん桁 よ桁	ご桁
項目	いち項目 いっ項目 ひと項目	に項目 ふた項目	さん項目	よん項目	ご項目
皿	ひと皿	ふた皿	さん皿 み皿	よん皿	ご皿
試合	いっ試合 ひと試合	に試合 ふた試合	さん試合	よん試合	ご試合
シーズン	いちシーズン ひとシーズン いっシーズン	にシーズン ふたシーズン	さんシーズン	よんシーズン	ごシーズン
品 （しな）	ひと品	ふた品	み品 さん品	よん品 よ品	ご品
種類	いっ種類 ひと種類	に種類 ふた種類	さん種類	よん種類	ご種類
世帯	いっ世帯 ひと世帯 いち世帯	に世帯 ふた世帯	さん世帯	よん世帯	ご世帯
セット	いちセット ひとセット いっセット	にセット ふたセット	さんセット	よんセット	ごセット
束	ひと束	ふた束	さん束 み束	よん束 よ束	ご束
玉	ひと玉	ふた玉	さん玉 み玉	よん玉	ご玉
チーム	いっチーム ひとチーム いちチーム	にチーム ふたチーム	さんチーム	よんチーム	ごチーム
粒	ひと粒	ふた粒	さん粒 み粒	よん粒 よ粒	ご粒 いつ粒
坪	ひと坪	ふた坪	さん坪 み坪	よん坪 よ坪	ご坪

通り	ひと通り	ふた通り に通り	さん通り み通り	よん通り	ご通り
人	ひとり	ふたり	さんにん	よにん	ごにん
箱	ひと箱	ふた箱	み箱 さんばこ さんぱこ	よん箱 よ箱	ご箱
場所 〈相撲〉	ひと場所	ふた場所	さん場所	よん場所	ご場所
鉢	ひと鉢	ふた鉢	み鉢 さんぱち	よん鉢 よ鉢	ご鉢
パック	いちパック ひとパック	にパック ふたパック	さんパック	よんパック	ごパック
袋	ひと袋	ふた袋	み袋 さん袋	よん袋 よ袋	ご袋
ブロック	いちブロック ひとブロック	にブロック ふたブロック	さんブロック	よんブロック	ごブロック
部屋	ひと部屋	ふた部屋	み部屋 さん部屋	よん部屋 よ部屋	ご部屋
幕	ひと幕	ふた幕	さん幕 み幕	よん幕 よ幕	ご幕
棟	ひと棟	ふた棟	さん棟 み棟	よん棟 よ棟	ご棟
役	ひと役	ふた役	さん役	よん役	ご役
枠	ひと枠	ふた枠	さん枠	よん枠	ご枠

表 6

数詞	1			2		3		4			5	
読み	ひと	いち	いっ	ふた	に	さん	み	よん	よ	し	いつ	ご
比率	100%	34%	29%	100%	45%	100%	47%	97%	39%	0	3%	100%

1 から 10 までの数詞の読みを提示することもできるが、5 以上の場合で用いられる語種の切り替えが少ないため、ここでは敢えて語種の切り替えが顕著である 1 から 5 までの数詞の読みをデータとして取り上げた。以上の表から、1 は 3 種類の読みがあり、2 と 3、4、5 はそれぞれ 2 種類の読みがあると観察できる。つまり、ここで数詞 1 が最も複雑な構造を持っているということがわかる。1 から 10 までの数詞を見ると、10 は「じゅう、じゅっ、じっ、と、とお」の 5 つの読みがあるため、最も複雑であると言える[16]。露出形と被覆形の概念（有坂 1957）に基づくと、和語「ひと」、「ふた」、「み」、「よ」、「いつ」と漢語「いっ」は自立的に使うことができないため、被覆形に分類される。一方で、漢語「いち」、「に」、「さん」、「ご」と和語「よん」は自立的に用いることができるため、露出形となる。「よん」、「なな」がよく漢語系の数詞として認識されるのは恐らくこの読みが頻繁に漢語系の数詞系列に出現しているからであると考えられる。

[16] 本来、10 の読みは「じっ」であり、1970 年代頃から「じゅっ」も許容されるようになった。

そして、以上の38項目のうち、すべての項目で和語系の数詞「ひと」が用いられ、使用率は100％を占めしている。一方で、漢語系の数詞「いち」は13項目であり、使用率が34％を占め、促音化された漢語系の数詞「いっ」は11項目であり、全体の29％を占める。つまり、「1」に関しては、漢語より和語のほうが明らかに使用頻度が高く、主流であることが示唆される。

数詞2について、和語系の数詞「ふた」と漢語系の数詞「に」が主に使用される。この中で、「ふた」という読みを取ったのは38項目、使用率は「ひと」と同様に100％となる。これに対して、「に」を利用したのは17項目であり、全体の45％を占める。よって、「2」の場合は、和語のほうが使用頻度が高く、主流となることが推測される。

数詞3の場合では、ほぼ逆の状況となり、和語「み」を用いたのは18項目であり、47％の使用率を占めるが、漢語「さん」は38項目のため、使用率は100％に上る。したがって、「3」となると、和語の使用頻度より漢語のほうが高くなり、主流となる。

しかし、「4」の場合はまた状況が変わり、「よん」が37項目で使用され、97％を占め、さらに和語「よ」を使ったのは12項目があり、39％を占めている。漢語「し」を用いる項目はなく、0％となり、和語が主流であることがわかる。実際、数詞4において漢語「し」という読みもあるが、以上の38項目の助数詞とともに使用できないだけである。要するに、切り替わるタイプにおいては、漢語「し」は通常現れないことが原則となる。そして、表6の和・漢語の使用比率から、数詞1や2、3には、読みのゆれも見られる。

また、形態上からみる語種の実際の使用状況を以下のように示す。

表7

数詞	1			2		3		4			5	
読み	ひと	いち	いっ	ふた	に	み	さん	よん	よ	し	ご	いつ
露出形	0	13	0	0	17	0	38	37	0	0	38	0
被覆形	38	0	11	38	0	18	0	0	12	0	0	1

上の表からみると、数詞1と2の場合は、和語系の数詞が明らかに多く使用されており、3になると、許容される読みを含め、ほとんど漢語系の数詞に切り替えられている。「し」は「死」の発音に通じており、数量詞においてはこの読みの出現率が非常に低い。このため、代わりに和語「よん」が用いられているのが一般的である。数詞5は、38項目の中で和語が使用されたのは「いつ粒」しかない。そして、表に掲載されていない6もほとんど漢語「ろく、ろっ」が用いられる。数詞7となると、「しち」は「いち」と聞き間違える恐れがあるため、「なな」のほうが多く使われ、38項目の中で「しち」が用いられるのは助数詞「幕」のみである。8はほぼ漢語「はち、はっ」、9も漢語「きゅう」である。10の場合は、和語「と」と結合する助数詞は「坪」と「棟」だけである。つまり、切り替わるタイプにおいて、数詞「1・2・4・7」はほとんど和語が使われて主流となり、「3・5・6・8・9・10」は漢語が中心となる。言い換えれば、和語が無標となるのは4つがあり、漢語が無標となるのは6つがあるという違いが見られる。

さらに、形態論的な観点から「いち」と「いっ」は数詞1の異形態であることが観察される。「いっ」はやや俗な言い方である一方、「いち」は少し上品な言い方となる。上記の38項目の中で、「いっ」を使用するのは11項目（家族、缶、区画、区間、項目、試合、シーズン、種類、世帯、セット、チーム）があるが、許容される言い方として7項目も見られる。10も「じゅう」、「じゅっ」、「じっ」のような異形態が見られ、「じゅう」は正式な言い方であり、「じゅっ」、「じっ」は俗語に相当する。また、「じゅっ」と「じっ」の場合は、前者は俗語にあたり、後者は

正式な言い方となる。つまり、語種が同じであっても、どちらが正式な言い方であるか、どちらが俗語に相当するかというような違いが見られる。

4. 2　一貫しているタイプ

前節を通じて日本語の数量詞における切り替えるタイプはそこまで多くないことが分かる。本節では、258 項目の中で語種が一貫しているタイプにはどのようなものがあるかを整理し、語種の使用状況を分析する。以下の表のように、漢語系と和語系、英語系の数詞にわけて順番に提示する。まず、漢語だけで一貫している項目を見ていくが、258 項目の中で以下の 4 項目しか見つからなかった。

表 8. 漢語で一貫しているタイプ

助数詞 ＼ 数詞	位（旧官位）	分〈割合〉（ぶ）	分咲き（ぶさき）	分袖（ぶそで）
1	いち位	いち分	いち分咲き	いち分袖
2	に位	に分	に分咲き	に分袖
3	さん位・さんみ	さん分	さん分咲き	さん分袖
4	し位	よん分・し分	し分咲き	し分袖
5	ご位	ご分	ご分咲き	ご分袖
6	ろく位	ろく分	ろく分咲き	ろく分袖
7	しち位	なな分・しち分	しち分咲き	しち分袖
8	はち位	はち分	はち分咲き	はち分袖
9	—	きゅう分・くぶ	く分咲き	く分袖
10	—	じゅう分	—	じゅう分袖

明治時代以前に「（正）九位」という位階があったが、現在「正一位」から「従八位」までの 16 階と規定されているようである。「三位」は「さんい」と「さんみ」という 2 つの読みがあるが、「さんみ」は連声であり、教養のある人は使うが、一般的な人はほとんど使わない。

分（ぶ）の項目において、「し」、「しち」は許容される読みであるが、漢語系の数詞として一貫しているため、対象として取り上げた。実際、「し」、「しち」より「よん」、「なな」のほうが主流な言い方となっている。

分咲きとは、花が開いた状態のことを指す。この項目の数量詞は桜の開花予想や天気予報などでよく見かける。例えば、「三分咲き」とは標本木の樹冠で約 3 割の花が開いた状態ということである。表 8 を見ると、10 以上の言い方は存在しないが、それは 10 になると、ほぼ「満開」の状態になるためである。また、「分袖」とは袖の長さを表す助数詞であり、11 以上の表現は存在しない。数詞 9 に対して、漢語「きゅう」と「く」の 2 種類の読みが見られるが、「きゅう」のほうが上品であり、「く」は俗語に当たる。

次に和語だけで一貫している項目を見たところ、258 項目の中で 4 項目しか見つからなかった。

表 9. 和語で一貫しているタイプ

数詞＼助数詞	日（か、にち）〈日数〉	日（か、にち）〈日付〉	柱（はしら）	幕目[17]
1	いちにち	ついたち	ひと柱	ひと幕目
2	ふつか	ふつか	ふた柱	ふた幕目
3	みっか	みっか	み柱	み幕目
4	よっか	よっか	よ柱	よ幕目
5	いつか	いつか	いつ柱・ご柱	いつ幕目
6	むいか	むいか	む柱	む幕目
7	なのか	なのか	なな柱	なな幕目
8	ようか	ようか	や柱	はち幕目
9	ここのか	ここのか	きゅう柱	きゅう幕目
10	とおか	とおか	と柱	じゅう幕目

〈日数〉と〈日付〉を表す助数詞は同じであるが、数詞「1」を表す際に、〈日数〉の場合は漢語「いちにち」を使う一方、〈日付〉の場合では和語のままである。〈日数〉の「日」は純粋たる和語で一貫するものではないと言えるが、1を除けば、10まで数詞はすべて和語であるため、特異な1項目として挙げておく。安田（2015）の調査によれば、奈良時代・平安時代に「1日」は「ひとひ（和語）」と言ったようである。これについて、詳しくは安田（2015：319）を参照されたい。また、本来であれば、「2日（〈日数〉）」以上を表す場合に、助数詞の後ろに「間（かん）」を付けて使われるが、日常生活ではよく省略される場合が多いようである。〈日付〉を表す「ついたち」は「月立ち（つきたち）」に由来すると言われている。11以上の数詞になると、助数詞は「にち」に変わり、「はつか」、「じゅうよっか」、「にじゅうよっか」を除けば、全部漢語となる。「じゅう」は漢語であるが、「よっか」は和語であるため、この2つの要素で組み合わせられたものを混種語と言う。また、最近、「じゅうよんにち」、「にじゅうよんにち」と言う人が増えてきているが、形態上ではこれらも混種語のままとなっている。つまり、これらを言う人は語種のことを意識せず使っていると推測される。

「柱（はしら）」は神様を数える際に使われる助数詞である。最も古い助数詞の1つであることもあり、共に組み合わせる数詞のすべても和語のままである。「ご柱」という言い方も存在するが、あくまでも許容される言い方であり、やはり和語のほうが広く用いられている。例えば、五柱神社（いつはしらじんじゃ）、別天神五柱（ことあまつかみいつはしら）、地神五柱（くにつかみいつはしら）などがある。「幕目」は演劇や芝居で幕から幕までの場面や段落を数えるのによく用いられる助数詞であり、11以上の言い方はないという。1から8までは和語であるが、9、10になると漢語に切り替わって「きゅう幕目」、「じゅう幕目」を使用する。よって、完全に和語で一貫しているものは非常に少ないということが明らかとなる。そして、「きゅう」、「じゅう」といった漢語系の数詞が強いとわかる。

最後に英語系の数詞を見るが、この系列の数詞は定着しているものがまだ少なく、辞書から以

[17] 辞書には記載されていないが、実際に日常生活において、「いち・に・さん・よん・ご・ろく幕目」という言い方が見られる。そうなると、「なな幕目」を除けば、全部漢語になっていることがわかる。つまり、辞書に記載されている言い方は実に使われている言い方と一致しないことがある。

下の 1 項目しか見つからなかった。

表 10. 外来語（英語）で一貫しているタイプ

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
アンダー	ワンアンダー	ツーアンダー	スリーアンダー	フォーアンダー	ファイブアンダー	シックスアンダー	セブンアンダー	エイトアンダー	ナインアンダー	テンアンダー

11 になると、英語系に代わって漢語が使用され、11 アンダーを「じゅういち・アンダー」、12 アンダーを「じゅうに・アンダー」と言う。つまり、10 を超えると、漢語系の数詞のほうが圧倒的に優勢である。また、定着していないものとして、「ワンセット」、「ワンポイント」、「スリーアウト」などが挙げられる。固定名詞のように使用されているものとして、「ツーショット」、「フォアボール」、「ワンチャンス（ワンチャン）」などがある。実際に、これら以外に、麻雀というジャンルにおいて、数詞の読みはほとんど一貫している。例えば、数牌の萬子の読みは「イーワン、リャンワン、サンワン、スーワン、ウーワン、リューワン、チーワン、パーワン、チューワン」となり、ほかの筒子、索子も同じである。

4. 3　両方とも用いられるタイプ

数量詞には以上の 2 タイプ以外、漢語と和語の両方が用いられるものも多く見られる。英語系の数詞は日本語への浸透が進むに連れて、「ワンセット、ワンポイント…」といった本来辞書に記載されていない言い方も日常生活で頻繁に使用されている。これを含めれば、両方でなく 3 種類も用いられると考え直さなければならない。一方、これらの言い方の出現により、数量詞は常に時代とともに変化していることがわかる。本稿は、このような英語系の数詞によって新たに作られたものを周辺的なものとして扱い、両方用いられるタイプには入れないことにする。つまり、このタイプは、主に漢語系の数詞と和語系の数詞を指し、漢語系の数詞には露出形「いち、に…」と被覆形「いっ、じっ…」の 2 つがある。

なお、数詞ごとに対応する各項目の読み方について、4. 1 節に示している表 5 から「5」までの数詞を確認することができると考え、表 11 に提示しないことにした。

表 11. 和・漢語両方とも用いられるタイプ

数詞	語種	助数詞	総項目	主となる
1	和語：ひと 漢語：いち・いっ	家族、カップ、缶、区画、区間、クラス、グループ、項目、試合、シーズン、種類、世帯、セット、チーム、パック、ブロック	16 項目	和語
2	和語：ふた 漢語：に	家族、カップ、缶、区画、区間、クラス、グループ、項目、試合、シーズン、種類、世帯、セット、チーム、通り、拍・泊、パック、ブロック	18 項目	和語
3	和語：み 漢語：さん	株、切れ、口、組〈靴下など〉、桁、皿、品、束、玉、粒、坪、通り、箱、鉢、袋、部屋、幕、棟	18 項目	漢語
4	和語：よ・よん 漢語：し	分〈割合〉	1 項目	和語
5	和語：いつ 漢語：ご	粒、柱	2 項目	漢語
6	和語：む 漢語：ろく・ろっ	——	0 項目	
7	和語：なな 漢語：しち	回忌、か条、行、号、字、時間、第〇番、代目、段〈階段など〉、度、度目、人、人前、年、杯、敗、版、番、尾、分〈割合〉、枚、幕、名、目〈碁盤の目〉、文、問、輪、羽	28 項目	和語
8	和語：や 漢語：はち・はっ	——	0 項目	
9	和語：ここの 漢語：きゅう・く	——	0 項目	
10	和語：と・とお 漢語：じゅう・じっ・じゅっ	坪、棟	2 項目	漢語

上記の 63 項目の助数詞の中で、和・漢数詞が併せて最も多く用いられるのは数詞 7 であり、28 項目の助数詞とともに現れる。その中でも「回忌」、「時間」、「人」、「人前」、「年」の場合は、和語系の数詞「なな」は許容される言い方である。本来、「しちかいき」というのは正式な言い方であり、「ななかいき」と言う人が増えてきているため、漢語より主流となっている。よって、「なな」は俗語に相当する。数詞 4 はほとんど和語「よん・よ」の読みが用いられるが、助数詞の分〈割合〉と組み合わせる際だけに、「しぶ」が許容される。これに対して、5 はほとんど漢語「ご」の読みを取るが、「粒」と合成する際に、「いつつぶ」が許容される。一方、「柱」は「ごはしら」のほうが許容される。10 は「坪、棟」の 2 項目でしか「と」が許容されない。そして、すべての項目において、6、8、9 は、「ろく・ろっ、はち・はっ、きゅう・く」の漢語系の数詞がほとんどである。「や」は「八重桜」や「八雲」、「八岐大蛇」といった固定名詞に用いられることがあるが、258 項目の助数詞を概観するところ、「や柱」しか見つからなかった。つまり、これらの数詞に対応する和語の読みが衰退していると言えるだろう。1 と 2 は最も複雑であり、和語の助数詞と組み合わせる際、一般に和語系の数詞「ひと、ふた」を取るが、近年、漢語系の数詞の浸透によって「いち、いっ」も使われるようになっている。数詞 3 は、「み」より「さん」のほうが多く用いられている。このように、実際のデータを通じて、和語と漢語の両方が用いられるタイプにおいて、数詞「1・2・4・7」の場合は和語が主流であり、「3・5・10」の場合では、漢語のほうが主流となることが明らかである。

5. おわりに

本稿は特定数量詞を構成する１つの要素である数詞の語種混用について、形態論的観点から考察を行い、定着されている和語系の数詞を用いる表現以外に、漢語系の数詞が優勢的な立場になっていることを明らかにした。そして、本研究は主に以下の２点を主張した。

①数詞「1・2・4・7」の場合は、和語が主流であり、「3・5・6・8・9・10」の場合では、漢語が主である。

②形態論的観点から言えば、和語が無標となるのは「ひと・ふた・よん・なな」の４つがあり、漢語が無標となるのは「さん・ご・ろく・はち・きゅう・じゅう」の６つがある。

このように、数詞の語種混用という新しい視点からの考察を通じ、和数詞より漢数詞のほうが強いという考えを証明する１つの客観的な根拠を提供することができたと考える。また、本稿で示した数量詞に関するデータは主に発音アクセント新辞典から抽出したものである。よって、助数詞の項目を増やし、量的研究を行うことは今後の課題としたい。さらに、このような実態になる背後に、どのような要因が作用しているかを掘り下げていきたい。

参考文献

有坂秀世（1957）『国語音韻史の研究　増補新版』三省堂.

城岡啓二（2009）「数詞ヨン・ナナ・キューの固有名詞への浸透について―地名、小字名、姓における四・七・九―」『人文論集　静岡大学人文学部社会学科・言語文化学科研究報告』巻 59 第 2 号、pp.73-105.

城岡啓二（2012）「日本語の基本数詞のナナ化とキュー化について：言語変化資料の整理と考察」（重近啓樹先生追悼記念号）『静岡大学人文社会科学部人文論集』巻 63 第 2 号 pp.109-148.

田野村忠温（1990）「現代日本語の数詞と助数詞―形態の整理と実態調査―」『奈良大学紀要』第 18 号、pp.194-216.

張琴琴（2024）「現代日本語における数量詞の分類について」『北海道大学大学院文学院研究論集』第 23 号、pp.283-302.

成田徹男（1998）「現代日本語の数詞の形態について」『名古屋市立大学人文社会学部研究紀要』第 4 巻、pp.41-54.

安田尚道（2004）「シチ（七）からナナへ―漢語数詞系列におけるナナの成立―」『青山語文』第 34 号、青山学院大学日本文学会、pp.130-141.

安田尚道（2015）『日本語数詞の歴史的研究』武蔵野書院.

柚木靖史（1999）「人数表現に関わる数詞の用法―『源氏物語』『平家物語』を対象として」『広島女学院大学論集』pp.128-107.

和算研究所塵劫記委員会（編）（2000）『現代語　塵劫記』和算研究所.

辞書類

NHK 放送文化研究所（編）（2016）『NHK 日本語発音アクセント新辞典』NHK 出版.

金田一春彦（監修）、秋永一枝（編）（2015）『新明解日本語アクセント辞典　第 2 版（CD 付き）』三省堂.

［謝辞］

本稿を作成するにあたっては、指導教員の加藤重広先生および査読の先生方から貴重なアドバイスをいただきました。厚く御礼申し上げます。本稿の内容の不備や誤りはすべて筆者の責任です。

（チョウ　キンキン・北海道大学言語科学研究室博士後期課程）